●特定課題研究●

実践報告　大和プレスクール「にほんごひろば」

―小学校入学前の多様な言語背景を持つ子どもたちへの就学前教育・保護者支援―

矢沢悦子・高橋悦子

key words
協働事業
就学準備教育
保護者支援
多様性
にほんご

1　はじめに

NPO法人日本ペルー共生協会（Asociación Japonés Peruana、以下、AJAPE（アハペ））が大和市との協働事業として行っているプレスクール[1]について報告する。

AJAPEの副会長である高橋（報告者）は、2009年に「外国につながる子どもたち」を対象に就学準備教育を行う教室であるプレスクールを立ち上げ、5年にわたって継続してきた。第35回大会の特定課題研究では、その経緯と2013年の教室の活動を中心に報告を行った。

本稿では、まずプレスクールの概要を2013年度の実施状況を例に報告し、ついでAJAPEがプレスクールを立ち上げ大和市との協働事業へと至った経緯を述べる。つづいて、見直しを続けてきたコース設計の振り返り、プレスクールの活動と子どもたちの参加の様子を具体的に紹介し、そして今後の課題を述べる。公開研究会、大会への参加ならびに本稿執筆を通して矢沢、高橋が話し合ったことを踏まえ、参加したことの意味づけを最後に報告したい。

2　大和プレスクール「にほんごひろば」（2013年度）の概要

2.1　大和市に居住する外国人住民

2013年現在、大和市には約5,500人の外国人住民がおり、人口比率（約2.4％）は、神奈川県内では愛川町、綾瀬市に続き3番目に高い。1980年、大和市にインドシナ難民のための「定住促進センター」が開設された。「隣接す

る小学校や自治会との交流が活発に行われ、地元にはセンターを支援するボランティア団体ができ」[2] たとある。大和市に外国人住民が多いのは市・市民が外国人を受け入れてきたからだと言える。

大和市の市立小学校には、最多のペルー、次いでフィリピン、ベトナムなど10カ国以上の外国籍の子どもがいる。2013年度は、新1年生の約2.2%が外国籍であった。また、日本語指導が必要だとされた児童が229人（外国籍：165人、日本国籍：64人）いた（大和市国際化協会機関誌「Pal」2013, Vol. 80）。

2.2　大和プレスクール「にほんごひろば」の運営組織

大和プレスクール「にほんごひろば」（以下、「にほんごひろば」）は、AJAPEと大和市との協働事業として実施されたものであるが、大和市側の担当課は教育委員会指導室（以下、指導室）と国際・男女共同参画課である。教室運営に直接関わっているのは、指導室と公益財団法人大和市国際化協会（以下、国際化協会）であり、国際・男女共同参画課は国際化協会との連絡調整を担っている。指導室は、①会場（生涯学習センター）の確保、②広報・募集、講師謝礼の調整、③市民からの問い合わせへの対応を行った。「にほんごひろば」は計50回開かれたが、そのうちの7回を国際化協会が担当した。実際には「子育てパートナー・てとて」（元保育士のボランティア団体、以下「てとて」）に委託して実施している。

AJAPEは残り43回の授業をスタッフ3名で担当した。矢沢（報告者）を除く2名は公募（ハローワーク）により採用した。加えて、大学生1名が週1回ボランティアで参加した。大和市から、講師・コーディネータ派遣について、報告者2名に謝礼が準備された。

2.3　参加した子どもたち

2013年度の「にほんごひろば」には、延べ17名（女児10名、男児7名）の多様な言語背景を持つ子どもたち（以下、子ども）が参加した。つながりのある国は、ペルー5名、フィリピン2名、中国4名、米国3名、ベトナム、ブラジル、ボリビア各1名である。2014年度就学予定の子どものほかにも、翌2015年度入学予定の子ども（3名、以下、5歳児）や小学3年生（1名）も

受け入れた。5歳児については親からの強い希望があり、小学3年の児童については来日が2014年2月12日で受け入れ場所がほかになかったからである。

17名中5名が日本で生まれ育っているが、そのうち3名は開始時には日本語でのやり取りが困難であった。親の一方が日本人という国際結婚家庭の子どもが6名（うち2名は姉妹）いたが、家庭内言語が日本語というケースはなかった。17名のうち3名が保育園・幼稚園（以下、園）に通いながら参加していた。3名とも日本語の日常会話ができる程度の力はあった。園との掛け持ち参加の理由を保護者に聞いたところ、子どもの日本語が不十分だと心配して、あるいは幼稚園で勧められて「にほんごひろば」への参加を決定したとのことだった。こうした保護者の話から、園側が子どもの言語発達に注意を向けていること、「にほんごひろば」の存在を知っていることがわかった。

14名は在宅保育であった。日本で生まれ日本で育っている子どもであっても、在宅保育の子どもたちの生活圏は限られている。親の属するコミュニティ以外の場所で日本人やほかの国の同年齢の子どもと遊ぶことはほとんどない。保護者の声から、「幼稚園に通わせたいが経済的に無理だ」「仕事があったら保育園に通わせられるけど」「申込に行ったら学期途中はできないと言われた」といった事情がわかった。

「にほんごひろば」は途中からでも受け入れている。開始後2カ月がたった2014年1月にも新たな参加者が7名あり、その5名は日本語が全くできない状況であった。

2.4　大和プレスクール「にほんごひろば」の活動内容

「にほんごひろば」は、11月から3月まで、週3回（水、木、金曜の午後14時～16時）の日程で全50回実施した。開催場所は、大和駅から徒歩10分のところにある大和市生涯学習センターの会議室である。大人用のテーブルとパイプいすの部屋であり、子どもが活動する環境としては適当とは言いにくい。しかし、場所を確保できたことは運営するうえでの安定材料であった。2013年は、目的を就学準備教育、就学児を持つ保護者への支援、文化的な多様性への寛容な態度の育成と設定した。その目的に沿ってコースを設計

し、教室活動を考えた。コース設計については「4.2　コース設計の考え方の転機」で、教室活動については「4.3　大和プレスクール「にほんごひろば」（2013年度）の教室の様子」で述べる。

3　大和プレスクール「にほんごひろば」事業開始までの経緯

高橋は川崎市で1991年より23年間「日本語指導等協力者」として、大和市では2003年より11年間「外国人児童生徒教育相談員」として活動してきた。いずれの地域でも「母語のわかる指導協力者[3)]」として頼りにされている。また、当時日本国内で発行されていたスペイン語新聞IPC（インターナショナルプレス、現在は紙ベースでの発行は行っていない）の日本の教育に関するコラム“A la escuela”（日本語訳は「学校へ」）を執筆していた。2週間に1回記事を書き、メールや電話での全国からの教育相談にスペイン語で応じ、スペイン語圏の人々に対して支援を行った。これらの情報を通して、高橋は、「情報がなく、いきなり小学校入学を迎えて戸惑う親子」「中学生になってから自分の子どもが十分知識を獲得していない問題に気づき嘆く保護者」「その人たちへの対応に苦慮する教師たち」に数多く出会った。南米では学年相当の勉強ができなければ進級できないという留年制度がある。日本は制度が違うと知っていても、自分の子どもが学習内容を十分に理解できないままに進級しているという状況を保護者が理解できずにいる例をよく見聞きしていた。また、中学生の支援をしていて、わからないことがあるときに先生や周りの大人に「わからない」と伝えることのできる力、わからないことを質問する力を小さい頃から身につけていたら問題は避けられたのではないか、と考えることが多々あった。

こうして幼少期からの教育の必要性を感じてはいたが、事業費がなかったので実行できずにいた。そんな折、2009年度に、文部科学省・国際移住機関（International Organization for Migration、以下、IOM）による「定住外国人の子どもの就学支援事業」[4)] 通称「虹の架け橋教室」事業の公募があった。絶好の機会だと思い応募したところ、採択された。この事業費を利用して、AJAPEは大和教室で小学生、中学生の支援を始めると同時に、プレスクールを開始した。当初の「虹の架け橋教室」事業では、就学前の子どもへの支援も認められていたのである。

プレスクール開始を前に、AJAPEのホームページ上や口コミで、日本の幼稚園教諭の資格と指導経験のあることを条件に「幼児プレスクールの教諭」を募集したが見つからなかった。矢沢は長く日本語教育に関わっており、大学院の同窓の高橋に頼まれてAJAPE町田教室で日本語ボランティアをしていたことがある。高橋は、教育経験は豊富であるが日本語教育の専門性がなく国語科の教科書だけで日本語を教えている現場を見て、子どもへの日本語指導には日本語教育の専門性が必要だと考えていた。そこで、幼稚園教諭の資格は持っていないが大学院での専攻（異文化間教育）が同じであった矢沢に声をかけた。矢沢は、それまでの日本語教育の対象が子どもではなかったし南米スペイン語圏も身近ではなかったので、できるだろうかと躊躇した。同時に、高橋の話を聞きながら、教える対象が異なっても日本語教育の根幹は同じはずだ、子育ての経験も役立つはずだと考えた。高橋の申し出を引き受け、2009年度からプレスクールで指導を行っている。

2009年度、2010年度のプレスクールは、南米スペイン語圏の子どもだけを対象としていた。AJAPEが南米スペイン語圏の人々への支援を目的に発足し、広報をその人々に向けて行っていたためである。当初は、簡単な日本語を教えるだけでなく、南米スペイン語圏の子どもたちの「母文化・母語の保持」も運営の目的とした。スペイン語母語話者でペルーの保育士資格を持つペルー人2名も指導者として加わり、スペイン語だけの授業を組み入れていた[5)]。

しかし、翌2011年、IOMより、プレスクールは「虹の架け橋教室」事業としては認められないとの通達があった。AJAPEとしては、それまでの支援活動で、日本の小中学校に通う外国の子どもと保護者の戸惑いを多く目にしてプレスクールの教育的意義を実感していただけに、継続したいという強い気持ちがあった。しかし、財源の確保という大きな問題に直面した。

大和市に対してプレスクールを提案する契機となったのは2011年4月末に行った「虹の架け橋教室採択記念式典」である。式典ではAJAPEの沿革、活動内容の報告をし、参加者にAJAPEの授業を見学してもらった。ペルー大使館をはじめ大和市側からも複数の参加を得た。大和市の関係者にAJAPEの活動を評価していただけたことが協働事業を行うきっかけになった。活動報告の中で財源があれば就学前の子どもの指導を行いたいと述べた

ところ、大和市側から「大和市の協働事業に提案したらいいのではないか」とのアドバイスがあった。

活動資金を得てプレスクール事業を安定させ、南米スペイン語圏以外の母語を持つ誰もが参加できる教室にしたい、と考えていた。また、「公共性」（齋藤，2000）を学び、地域のNPOが行政と協働で活動することの大切さを感じていたところでもあった。そこで至急申請の準備を行った。大和市の外国人児童生徒教育相談員として実績を積んできた高橋が、事前に教育委員会に提案内容を説明し、共同提案者としての参加協力を得た。最終的には教育委員会のみならず国際・男女共同参画課にも共同提案者として参加してもらえることになった。国際・男女共同参画課の組織上の所管団体である大和市国際化協会は、外国人親子の教室「親子にほんごひろば」を委託開催していたが、この教室をAJAPEの事業の中に組み込むということで提携の道が見いだせた。このとき、地域で長年外国人の支援をしているほかのNPO団体と活動内容が重複していないかどうかも確認した。

2011年5月、大和市の「市民提案型協働事業提案」に応募した。提案では就学前準備教育としてのプレスクールの意義、重要性を訴えた。同年8月、AJAPEの提案が採択された。2011年度の募集要領にある「検討のポイント」（「協働による効果」「提案内容の妥当性」「提案内容の実現性」「市民活動の特性」「提案内容の実施能力」[6)]）から、AJAPEの提案事業が大和市から協働するに足ると評価されたのである。

2011年8月に採択が決まった。制度のうえでは事業の実施は翌年2012年4月からであったが、2011年11月、教育委員会の提案で、翌年からの協働事業の準備として大和プレスクール「にほんごひろば」が始まった。

4　大和プレスクール「にほんごひろば」の学びの質の転換

4.1　2011年当初のコース設計の考え方と授業の内容

2009年度は、開始にあたり、愛知県「プレスクール実施マニュアル」（2009）を参考にコース設計を行った。「実施マニュアル」にある「覚えたいことば」を基に学習項目（言葉と表現）一覧を作った。それを各回に割り振り、授業内容を考えた。例えば子どもに体の名称を覚えてほしいとき、実物を指差して教えるだけでもいいが、手遊び歌を取り入れたり、福笑いをしたり、名称

表1　2011年度「にほんごひろば」プログラム（一部）

No.	14:00–14:10	14:10–14:55	休憩	15:05–15:50	15:50–16:00
1	出席確認 挨拶	・自己紹介 ◆お名前は？　わたしは○○です ・身体部位：目、鼻、口、歯、耳、顔、頭、髪 ◆これは～です、これは何ですか、～です～は？ ・歌：♪むすんで開いて♪（その手を〔身体部位〕）	トイレ	・S-S活動 1)「お名前は？」、「○○です」 2）♪むすんで開いて♪（個人、ペア、グループ） ・お絵かき（頭部） →身体部位復習	片付 挨拶

を言いながら絵を描かせたりすると、子どもが喜び覚えも早い。これはプレスクールを始める前から経験的にわかっていた。そこで、新しい活動を見つけると取り入れてみるようにした（表1）。なかには、媒介言語がないと理解できないために子どもが興味を示さないことがわかって急遽取りやめた活動もある。このように活動の工夫は繰り返し行ったが、コース設計は2011年度まで、ことばや表現が中心だった。

2012年度のコースを始める前に、過去2年の経験から、子どもたちと保護者への異文化間教育の実践、就学前準備教育の実践という点から見直しが必要だと感じていた。そこで、「にほんごひろば」のコースプログラムについて大学院で指導を受けた日本語教育の専門家に相談したところ、「トピックを設け、場面を設定した活動を通してことばを学べるようにしてはどうか」と助言をもらった。そこで、2012年度は、コース全体を6期に分け、それぞれに「目標」と「トピック」を設けた。第4期はトピックを「世界の家・世界の遊び」、目標を「多様な文化に触れる」とし、異文化間教育の要素を内容と活動に組み入れた（表2）。子どもたちが活動を通して言語を身につけていく場、自分と異なる相手と関わり自他を認めていく場として「にほんごひろば」を位置づけ、プログラムを組み直した。この年の実践を、雑誌『言語教育実践　イマ×ココ』に投稿した（矢沢，2013）。実践を記すことを通して、プログラムに「場面と活動」を入れ、言語項目を「理解」と「産出」に分けたものの、まだまだ言語項目中心であったと気づいた。

表2　2012年度「にほんごひろば」プログラム（一部）

	第4期（8回）		
	世界の家、世界の遊び（多様な文化に触れる）		
	場面と活動	言語項目［理解］	言語項目［産出］
4-1	教室で お正月の遊び 1）お正月のあいさつ 日本語で、母語で 2）お年玉 3）遊び：かるた、福笑い ひらがな読める？ 1）あいうえおの歌 2）あ行並べ替えクイズ 3）迷路：あいうえお	・あけましておめでとうございます ・～語で何と言いますか ・～って知ってる？ ・～で遊びましょう ・いっしょに遊ぼう ・ならべます、あげます、もらいます ・お正月、お年玉、福笑い	・あめましておめでとうございます ・うん、知ってる／ううん、知らない ・いっしょに遊ぼう ・次はわたし／ぼく ・もう一回 ・おもしろい、おもしろくない、おもしろかった、おもしろくなかった ・できる、できない、できた、できなかった

4.2　コース設計の考え方の転機

「にほんごひろば」の目的の一つは「就学準備教育」であった。そこで、改めて幼稚園教育について学んだ。2012年度のコースプログラムが「幼稚園教育要領」（文部科学省、平成20年3月）にある「領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）」とそう違っていないことは確認したが、まだまだ言語中心のコース設計であり、さらに見直しをしなければいけないと考えた。教室の子どもの様子を振り返ってみても、子どもたちは教室での友だちと一緒の活動が楽しければ喜んでいる。楽しい空間ができると、子どもたちは耳に入った言葉を真似して使っている。活動が楽しそうだと思えば、離れていた子どもも加わろうとし、ほかの子どもも仲間として受け入れようとしていた。この振り返りを原点に、子どもが参加を楽しみ学びや成長が促されるプログラムにするには、と模索を続けた。幼稚園に通っている親子から活動内容を聞き出し、「てとて」の保育活動を参観した。また、愛知県の「プレスクール実施マニュアル」を読み直したり、ほかのプレスクールの報告を聞きに行ったりした。

こうして2013年度は、「活動を通して子どもは何を知るか、何を経験するか」（「内容」）「子どもが自分の意思を伝えていくためのことば、他者との関

表3　2013年度「にほんごひろば」のトピック

	トピック	目標	実施期間
1	ともだち	プレスクールに慣れる	3週間（6回）
2	元気な体	絵本や物語に親しむ、手や体を動かす	2週間（3回）
3	健康な体	衛生習慣を身につける	3週間（6回）
4	いろいろな家や遊び	多様な文化に触れる	3週間（8回）
5	ルールや約束	ルールや役割があることを知り、守る	4週間（12回）
6	もうすぐ小学校	小学校がどんなところか知る	3週間（8回）

表4　2013年度「にほんごひろば」プログラム（一部）

	第4期（8回）			
	いろいろな家や遊び			
	ねらい	活動	内容	ことば
4-1	母語、継承語に親しむ 絵本や物語に親しむ	お正月の遊び 1）お正月のあいさつ 日本語で、母語で 2）絵本読み聞かせ： 『あけましておめでとう』 3）遊び：福笑い、すごろく	・お正月の挨拶を日本語、母語で言う ・友だちの親が日本語以外の言語で話すのを聞く ・友だちを誘って、遊ぶ ・遊びのルールを知る	・あけましておめでとうございます ・いっしょに遊ぼう ・今度は／次は わたし／ぼく ・わたし／ぼくが先 ・もう一回 ・休み、進む、戻る ・おもしろかった、おもしろくなかった ・できた、できなかった

係を作り社会に参加するためのことば」（「ことば」）を軸に据えた。「トピック」は、例えば、2012年度の「世界の家・世界の遊び」を「いろいろな家や遊び」に変えた（表3）。「伝統的家屋」よりも子どもたちの周りの家のほうが身近であり、家の名称（玄関、台所など）も覚えやすい。「いろいろな遊び」とすることで、保護者が知っている遊びを取り上げやすくなり、保護者の活動参加を促しやすい（表4）。

4.3　大和プレスクール「にほんごひろば」（2013年度）の教室の様子

コースプログラムの「ねらい」に沿い、かつ子どもたちが楽しみながらできるよう、空間の利用方法を工夫した。会議室の一角に、風呂やトイレ、校庭、信号や踏切のある町を作り（床にテープを貼り、表示や標識で場所名を示して想像させた）、読み聞かせのために絵本や紙芝居を借りたり古書店で購入したりした。その中には、子どもの反応が芳しくなかったため、次年度は見直しが必要だとわかったものもあった。テレビの幼児番組や幼児向け雑誌からヒントを得た活動もある。

トピック「健康な体」と「もうすぐ小学校」では、国語科の1年の教科書（光村図書、大和市の小学校で使用）にある「くじらぐも」と「おおきなかぶ」を取り入れた。「くじらぐも」は教科書のままでは子どもたちには難しいと考え、リライトして読み聞かせた。リライトが不十分だったのかストーリーへの反応は今一つだった。しかし、読み聞かせの後、みんなで体操し、床の上にテープを貼って作ったくじらの雲に乗って空の旅に出るという「くじらぐもごっこ」には、どの子どもも喜んで参加していた。みんなで体操して雲に乗るという体験が記憶に残って小学校で学習する際に活性化されれば、学びの入口での拒否反応が減じられるのではないか。「おおきなかぶ」は「てとて」が担当する回でも取り上げられていた。子どもたちはこのお話が大好きで、かぶを引っ張る場面ではみんなが一斉に掛け声をかけていた。最終的にほとんどの子どもがお話の筋を覚えた。

また、将来の読み書きの学習に向けて、絵本の読み聞かせや紙芝居をできる限り取り入れるようにした。2013年度に取り上げた絵本は24冊になった。子どもたちがそろうまでに読むこともあるが、多くはトピックや活動内容に合わせて絵本を選んだ。例えば、トピック「健康な体」のときは、『うがいライオン』（鈴木出版，2010）や『おふろだいすき』（福音館書店，1982）を選んだ。絵本や紙芝居は大和市立図書館から貸し出しを受けた。図書館は「にほんごひろば」を行っている生涯学習センターの隣にあり、家庭にはない大型絵本が借りられる。大型絵本を見せたときの子どもたちの反応は驚くほど様々だった。園に通っていて普通のサイズの絵本に慣れている子どもは「わぁ！」と声をあげ、絵本を初めて目にする子どもからは特に大きな反応はなかった。改めて、経験が事柄の意味や価値を認識する基盤になると感じた。

正月（福笑いやお手玉などで遊ぶ）、節分（豆まきをし、年の数だけ豆を食べる）、雛祭り（折り紙で雛人形や三方を作り、三方に入れた雛あられを食べる）も活動に入れた。日本の季節の行事の紹介だけでなく、子どもたちが一緒に遊ぶ・作る・食べるという普段とは異なる活動を通して、生活の規律を学び、仲間と分け合う・対話するという参加の仕方を経験的に学ぶ機会となった。

子どもたちは、家族でショッピングセンターや家の近くの公園に行くことはあるようだが、集団で公的な場所へ行ったことのある子どもはいなかった。小学校に入ると、班での登下校があり、春の遠足がある。学校で行われる活動を体験すること、集団行動に慣れることを目的に、図書館、スポーツセンター、消防署、小学校への訪問を活動に入れた。いずれも大和市の機関であり、「にほんごひろば」が大和市との協働事業であることでスムーズに受け入れてもらっている。子どもたちは、図書館で静かに座って本を読み、消防署では消防服を着て消防車に乗った。小学校訪問では国際学級、1年の教室、図書室、体育館を見学し、上履きに履き替え、教室まで歩いていき、児童名が書いてある机に座るという体験ができた。

写真1　保護者と学校見学

写真2　みんなで作ったプレゼント

保護者には、子どもの集団内での行動を見る場を提供するよう心がけ、就学準備に関わる活動では参加を呼びかけた。教室の中では、保護者に母文化・母語の保持者として「先生」役をお願いする機会を作った。国での遊びを教えてもらったり、国旗などについて母語で話してもらったりした。単語や折々の挨拶などを「○○語で何ですか」と子どもに尋ね、答えられない場

合は子どもが親に聞いてみんなに伝えるようにした。友だちの母語・継承語がわからなくても、どの子どもたちも話を聞き、やり取りを見つめていた。作品作りの活動では、親にもそれぞれ作ってもらい、作品発表も子どもと同じように日本語でしてもらった。活動中、子どもの活動や言動を目の前にして親がつい手助けや口出しをしてしまうことがあった。親の介入で子どもが安心を得ているように見えた場合はそのままにし、子どものやる気や自立を削いでいると見えた場合は控えてもらうようにした。

生活面の習慣は、場面に合わせて繰り返し行動させて身につくようにした。挨拶をする、衣服や持ち物を決まった場所に置く、使ったものを片づける、黙って人のものを取らない、「ありがとう」「ごめんね」を言う、座って話を聞く、「せんせい、トイレ」と言ってから行くなどである。初めてのことであっても、友だちが行っているのを真似して繰り返しているうちに、自然に行動するようになっていた。3月の終了時には、指導者側が意図して指導を続けたことはほぼできるようになった。

5　大和プレスクール「にほんごひろば」の活動の成果と今後の課題

5.1　参加者の声に見る成果―保護者へのアンケートとインタビューから

「にほんごひろば」の終了後、保護者にアンケートを行った。回答者は8名である。8名のうち2名は子ども2名を参加させており、子ども一人ひとりについて回答してもらったので、集計数は10件となる。日本語母語話者の母親、日本語の読み書きができる中国語母語話者の母親には、回答を書いてもらった。母語のできるスタッフが母語で質問し、日本語に翻訳してアンケートに記入するようにした。

表5は、質問「参加前と比べて子どもができるようになったこと」への回答の集計で、保護者が「できた」「できる」と判断した子どもの数である。保護者の主観によるものではあるが、多くの保護者が以前はできなかったが今は「できる」と答えたのは、日本語である（表5の網掛けの項目）。

「にほんごひろば」の時間や回数については、1名が1回の時間を「3時間」がよいと答えたが、他は時間（午後2時～4時）、回数（全50回）ともに「よい」とした。

自由記述の「にほんごひろば」への意見で多かったのは授業内容について

表5　保護者へのアンケート　「できるようになったこと」

		＜まえ＞できた	＜いま＞できる		＜日本語＞	＜まえ＞できた	＜いま＞できる
1	じぶんの　なまえが　いえる	6	9	9	じぶんの　なまえが　よめる（ひらがな）	4	10
2	ともだちと　あそべる	9	9	10	じぶんの　なまえが　かける（ひらがな）	3	8
3	といれに　いきたいことを　つたえられる	10	10	11	ひらがなが　よめる	2	5
4	してほしいことを　せんせいやともだちに　つたえられる	6	7	12	ひらがなが　かける	2	4
5	いすに　すわって　はなしが　きける	7	8	13	すうじ（1, 2, 3, 4…10）を　にほんごで　いえる	4	10
＜日本語＞				14	すうじ（1, 2, 3, 4…10）を　にほんごで　きいて、かける	1	7
6	「こんにちは」「さようなら」が　いえる（にほんご）	5	10	15	できなかったけど、できるようになったこと ・天気と日付が言える。 ・遊びのルールがわかった。 ・動物や果物の名前が少し言えるようになった。 ・日本語の聞く力がのびた。		
7	「ありがとう」「ごめんなさい」が　いえる（にほんご）	5	8				
8	せんせいや　ともだちの　はなしが　わかる（にほんご）	1	6				

であった。「みんなが参加できるようになっていた」、「ひらがなを教えるとき、いきなり教えるのではなく、歌を歌ったりしてからだった。導入から学習へ入っていく方法がとてもよかった。子どもはそういう方法のほうがよく興味を示して学習に向かっていけると思う」という声があり、指導者としては嬉しかった。「いろいろな国から来ている友だちに出会えた」という声もあった。2年続けて参加した子どもの親は「昨年は先生方の接し方がソフトだったが、今年は子どもの行儀や態度が悪いとき厳しく接していた。入学の準備のためにはふさわしい扱いだと思う」と書いていた。「もう少し前から始められればよかった（2月下旬に来日して参加した子どもの保護者）」「寒いとき自転車で連れていけなかった。だから、休むことが多かった」などの

回答もあった。アンケートに答えた保護者から批判的な意見は出なかった。また、子どもを最後まで参加させていたことからも、「にほんごひろば」は保護者の期待に一定程度応えていたと思われる。

5.2 「プレスクール」継続に向けて―今後の課題

(1) プレスクール事業の周知を図り、参加を広く呼びかける

AJAPE単独のプレスクール、大和市との協働事業「にほんごひろば」としてプレスクールは既に5回行っているが、まだまだ周知されていない。2014年7月に行った大和市立小中学校の教師（外国人児童生徒担当者、担当経験者）へのアンケート結果では、プレスクールが行われていることを知っていると答えたのは、小学校で23名中15名、中学校で13名中3名だった。

AJAPEの「虹の架け橋教室」にやって来る小学1年生の中には、プレスクールに参加していたらと思う子どもが2014年度にもいる。引き続き「にほんごひろば」の周知を図って参加を広く呼びかけることが大きな課題である。

(2) 参加を促す送迎方法や成果の評価法を具体的に考える

「にほんごひろば」への参加率が低かった（20%前後）子どもの保護者3名に不参加の理由を尋ねたところ、「距離があって送り迎えが大変」「母親が仕事を始めたので連れて行く人がいない」「送迎がないから」との回答だった。3名とも在宅保育であった。予算的には困難だが、車による送迎ができれば参加が増え、しかも安定した参加になるであろう。「にほんごひろば」終了後、子ども一人ひとりについて成長の様子を書いた「報告書」を作成し、指導室、小学校へ届けた。

6　実践を振り返って―特定課題研究への参加の意味

特定課題研究に参加し、野津氏の大和プレスクール「にほんごひろば」についての読み解きから、それまでの子どもと保護者、学校、AJAPEというネットワークが大和市との協働事業となったことでより効果的なネットワークになったことを確認できた。田渕氏の「子どもたちにとって自分を肯定する場」としてプレスクールが機能しているかという問い直しに、引き続き努

力しようと意を新たにした。山田氏には「にほんごひろば」を参観していただき、大会後ご専門のアンチバイアス教育に関するご著書を送っていただいた。幼児期の遊びと学びの大切さ、小学校教育につなげる幼児期教育の重要性について貴重な示唆をいただいた。齋藤氏は「にほんごひろば」を参観され「保護者をもっと巻きこんで、家で子どもに働きかけてもらう工夫をする」「スタッフの二人も役割を持てば、主体的に関われるのでは？」などの具体的なアイディアをくださった。

高橋、矢沢は、専門的知識（理論）、経験知（実践）のどちらにも偏ることなくどちらも大事にしたいと常々話し合っており、「省察的実践者」（ドナルド・A・ショーン，2007）でありたいと考えている。特定課題研究に参加し、大会および大会までの過程で登壇者、運営委員、参加者から質問を受けコメントをいただいたことで、自分たちの行動や活動を客観的に見ることができた。また、プレスクールの意味を捉え直すことで、今後の活動に自信を持つことができた。

「就学前の子どもへの支援」の重要性は以前から述べられており（佐藤，2009）、プレスクールの在り方は「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」（山田，2012）で提案されている。「にほんごひろば」の実践知をことばで表し、同じ課題を持つ人々への資源としていきたい。また、一般の人々に理解してもらえるような活動を今後も続け、プレスクールが一市民団体の提案事業から市の一般事業へと続く道を探っていきたい。

〈注〉

1) 「プレスクールとは、未就学児が、小学校入学後にスムーズに学校生活に移行できるように、「入学準備教育」を行う場である。」文部科学省「定住外国人の子どもの教育等に関する政策懇談会提案メモ」より http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/008/shiryou/attach/1290137.htm（2014/9/23閲覧）

2) 難民事業本部「インドシナ難民とは」http://www.rhq.gr.jp/japanese/know/i-nanmin.htm（2014/9/23閲覧）

3) 文部科学省「外国人児童生徒に対する支援施策について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301/009/007.htm（2014.9.23閲覧）

4) 「不就学・自宅待機となっている外国につながる子どもを対象とした緊急支援」であり、「子どもが地域で孤立しないよう、日本語等の指導や学習習慣の確保を図るための場」。「主に公立学校への円滑な転入が出来るようにすること」を目的としている。AJAPEは2009年度から毎年、実施を委託されている。国際移住機関 http://www.iomjapan.org/act/kakehashi.cfm（2014/9/23閲覧）

5) 2009年度は週15コマのうち2コマ。2010年度は週4コマのうち1コマ（1コマ＝45分）。

6) 「平成21年度協働事業等提案募集要領」http://www.city.yamato.lg.jp/web/katudo/H21teian.html（2014/9/23閲覧）平成26年度の「協働事業提案」では、「公開プレゼンテーション　評価のポイント」として「市民活動の特性」「目標設定」「実施手法」「計画性」「協働による効果」の5項目が挙げられている。

〈引用文献〉

愛知県プレスクール実施マニュアル検討会議（2009）『プレスクール実施マニュアル』http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000028/28953/hyosimokuzi%2822.8%29.pdf（2014/9/23閲覧）

齋藤純一（2000）『公共性』岩波書店.

佐藤郡衛（2009）「転機にたつ外国人の子どもの教育―生活者、社会の構成員という視点から―」齋藤ひろみ・佐藤郡衛（編）『文化間移動をする子どもたちの学び―教育コミュニティの創造に向けて―』ひつじ書房，3-18.

ドナルド・A・ショーン（柳沢昌一・三輪建二訳）（2007）『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』鳳書房.

矢沢悦子（2013）「大和プレスクール『にほんごひろば』での取り組み」『言語教育実践　イマ×ココ』創刊号，ココ出版，46-50.

山田千明他（2012）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続―教科活動につながる協同的な遊びと学びについて考える―」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』7, 59-68.

（やざわ　えつこ　特定非営利活動法人日本ペルー共生協会　日本語コーディネーター　日本語教育・異文化間教育）

（たかはし　えつこ　特定非営利活動法人日本ペルー共生協会　副会長・全体コーディネーター　バイリンガル教育・異文化間教育）